

Title	宋代書院研究の現状と課題：2000年以降を中心に
Author	金 甲鉉
Citation	都市文化研究. 19 卷, p.50-56.
Issue Date	2017-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
Description	研究展望
DOI	10.24544/ocu.20171213-007

Placed on: Osaka City University

◇研究展望◇

宋代書院研究の現状と課題

—— 2000年以降を中心に ——

金 甲 鉉

はじめに

書院は、唐末に蔵書や士人らの学習を目的に成立し、五代南唐の時期に白鹿洞書院が創建されてから教育機関として機能しはじめた。特に唐末五代の混乱を収拾した宋代の平和な雰囲気の中、各地から学問への要求が高まるにつれ、著しい発展を遂げる。以降、元・明・清代に至っては全国に広まるのみならず、言論活動の中心になるなど、量的にも文化的にも全盛期となった。

このような書院は、中国前近代の代表的な教育機関として多くの学者の関心を引いてきた。書院を主題とする研究は、早くは1920年代から2007年まで2,000件以上が発表されており、現在も多くの学術論文が絶えることなく出ている。特に1980年代から1990年代の間には、書院研究の画期的な成果が多く出され、現在まで影響を及ぼしている。

この間には総合的な分析の外、政治・社会・経済など書院研究の観点が多角化していく。また、史料整理作業が活発に行われ、趙所生・薛正興主編の『中国歴代書院志』(1995)、季嘯風主編の『中国書院辞典』(1996)、陳谷嘉・鄧洪波主編の『中国書院史資料』(1998)、鄧洪波編纂の『中国書院楹聯』(1999)などが出版された。

その成果として、李弘祺(1995)、陳雯怡(2004)¹⁾など多様な研究成果が出された。これらの研究は多様な観点から書院を分析してはいるが、主に書院の官学化という共通の一つの問題に着目している。そして、多くの研究が通史的な流れの中で宋代書院を見ているため、宋代書院についての深く掘り下げた研究はまだ不十分であった。

一方、欧米でも同時期に刮目すべき研究成果が出されており、その中でもJohn W. Chaffee(1985)、Robert P. Hymes(1989)、Linda Walton(1999)が著名である。これらの研究は、早くから地域社会と書院の関係について分析を行っている。東アジアでは、近年ようやく地域社会における書院の立場に着目する研究が現れたことと比較すると、欧米での研究はかなり早期から先進的な研

究がなされたと言える。

以上の1980年代から2000年以前の研究動向から、この時期の書院研究が持つ意義を大きく二つにまとめることができる。その一は、書院研究の本格化にある。以前の書院研究は教育史あるいは思想史の中で扱われていたが、この時期からは独立した一つの主題として研究が進んだ。さらに文化史・社会史の観点により、政治・社会・経済などの多様な方面からの分析が行われ、書院そのものに関する研究が本格的に始まったと評価することができる。その二は、書院関連史料の整理による研究土台の構築にある。以前からも地域ごとの、又は各書院ごとの史料整理は行われたが、それを網羅する作業はなかった。1990年代半ばから大量の史料を一つにまとめた出版物が登場し、現在まで貴重な資料として使われている。

上記の成果を踏まえ、現在も引き続いて多くの学者が研究を行っている。本稿では、その中でも宋代に関わる内容を中心にみていく。宋代は中国書院史において、後代まで引き継がれる書院の形式や形態が確立し、広く知られている書院の原型が成立した時期として意義深い。そのため、上記の研究以降2000年から現在までの宋代書院研究を、先行の研究史を参考しながら、その現状を整理し、これからの書院研究における課題について述べていきたい。

1. 史料と研究成果の集成

研究動向について見る前に、まず史料と既存研究成果の整理作業について確認していく。1990年代に進行した史料整理作業は、最近も引き続き行われている。特に『中国書院文化叢書』(2000～)、『中国書院学規集成』(2011)などを編修した鄧洪波氏の活躍が目立つ。

『中国書院文化叢書』はシリーズ物であり、1999年に出版した『中国書院楹聯』を含み、『中国書院章程』、『中国書院攬勝』、『中国書院学規』(以上2000)、『中国

書院詩詞』(2002)などが出版されている。これらは近代の書院までを対象として各地域ごとに書院を並べ、資料をまとめている。最新刊は宮高濤氏の『嵩陽書院』、邵群氏の『万松書院』(以上2014)などがあり、各書院の書院志としての性格が強い。

『中国書院学規集成』は地域ごとに編を分け、呂祖謙の麗澤書院規約から現代の中國文化書院の学規まで各書院の学規を網羅したものである。さらに、日本や韓国書院の学規までを附録として入れており、東アジア書院の学規を広く集めたものでもある。これに加えて張勁松氏と蔡慧琴氏は、『中国書院学規集成』から漏れている内容を江西省を中心に「江西書院学規補遺」(一・二〔張〕・三〔蔡〕, 2015)で補足した。

史料整理作業の外、書院研究史を整理し、研究状況を紹介しているものも李弘祺(1990)以来、持続的に出ている。まず、書院研究史を総合的に整理しているものとして鄧洪波(2007, 2008)、陳潘(2011)などが挙げられる。特に、鄧氏は民国時期から2007年に至るまでの書院研究史を時期ごとに網羅しており、中国における書院研究の動向を把握するために十分な参考価値がある。さらに、2008～2013年の間は毎年書院研究状況を「〇〇年書院研究綜述」という題目でまとめ、研究動向が一目で確認できる。

また、以前の研究成果をまとめる作業も同時に進んでおり、湖南大学を中心に『中国書院』という題目で出版されている。現在、第八輯(2013)までできており、これまでの研究成果を網羅して載せている。

これらの作業は書院研究の基盤となり、多くの学者により良い研究環境を提供している。次章からは、同時期の研究動向をまとめ、その傾向について述べていく。

2. 既存研究の延長線上にある研究

2000年以降の書院研究において最も目立つ点は、その量的な増加である。中華圏における書院研究を対象とした鄧洪波氏の分析によれば、1920年から2007年までの間に発表された研究論文の数は2302件であり、その中で半数を超える1240件の論文が2000年から2007年間に発表されたという。特に2005年以降、2013年までは毎年200件以上の研究論文が出されるほど、数量的に大幅に増加している²⁾。

その背景には様々な原因があると考えられるが、まずここでは中国内の高等教育状況について指摘しておく。中国では1980年代から再び私立大学が認定され、現在は約1500ヵ所まで数が増えている。しかし、中国の高等教育政策は国立大学、公立大学を中心としているため、私立大学の立場が曖昧になっている。私立大学の

学位が認められない場合や2011年になってから初めて大学院生の選抜が一部認められたことを見ても、その状況が分かる。このような問題の解決の一つとして、官学とは別として存在した書院への関心が高まり、その教育システムや経済問題、官学との関係などに関する研究が進行したと考えられる。

その動向の大略をまとめると、2000年前後から2005年に至るまでの時期と2005年以降現在までの時期に分けてみることができる。両時期は主に教育機関として書院が有する特性を探ることに重点を置いている点で共通している。その中でも、書院組織や教育システム、教育内容などについての分析が多い。ただし、2005年以降の研究は、その多くが以前の研究を踏襲し、現代の高等教育に示唆を与える点を考察するものが多い。

まず、2000年前後から2005年に至るまでの時期を見つめる。2005年以前の研究の中で教育機関としての書院について総合的な分析を行ったものとしては、上述した陳雯怡(2004)と李兵(2005)が代表的である。

陳氏は両宋期全体を対象として詳しい分析を行っており、主に南宋期に集中して宋代の教育がどのように変遷したのかについて考察している。その中で書院を、当時の士人らがもっていた教育理想を具現化した所と見なし、私学としての特徴を強調している。官学化の問題についても、書院を制度化させ、継続性をもたすために官府の力量を利用しただけであり、実際に官学化したわけではないという。その分析は宋代書院全体を総合的に扱っており、時間の流れによる変化を重視している。

李氏は書院教育と科挙の関係について唐から清までの長い期間にわたって分析している。宋代書院についても、書院の分布、科挙登第者の数などを統計学理論を用いて分析し、書院と科挙登第の関連性を証明している。教育内容についても、書院が科挙に対して排他的であるという既存の認識から脱し、科挙教育も同時に重んじていたと述べている。

これらの内容から見れば、2000年を前後にしては書院の官学化というテーマの下で、書院が持つ私学あるいは官学としての特性を表すことに集中していたことが見て取れる。このような傾向は10年以上経過した現在までも引き続いており、その中で書院の機能やシステム、教育内容などについて研究が行われている。ただし、その中身をみると、多数の研究が以前の研究を踏襲しているようなイメージが強い。

例えば、李艷婷(2014)では、宋代書院の形成・発展過程について政治面から分析している。科挙制度の影響によって書院の教育機能が強化されたが、興学運動以後に一時的に衰退し、理学の勃興に伴って全盛期を迎えたという。また、閻利雅(2009)では、宋代私学の特性として半独立性、強い融合性、制度としての確立、科学技

術への無関心を挙げており、その中でも社会教化機能を強調している。特に私学の学術面での自由、人材養成の役割、読書風潮の普及などが社会教化に関わり、官学の貴族化と好対照となる特徴であると述べている。張曉榮・葉美蘭（2014）をみると、宋代書院の発展背景として経済・政治・文化面から分析を行い、産業生産性の増大、印刷術の発展、科挙と官学の腐敗、理学の発展を挙げている。また、都市から離れた場所への立地、経済の半独立性、学術の自由・自主性が特徴であるという。以上の例からみられるように、新たな発見や観点を持つというよりも、既存の成果を繰り返してまとめているような内容に止まっている場合が多い。

その他にも、既存の研究成果を用いて現代教育に示唆を与える点を探る研究が多い。鐘景迅（2006）、張世敏（2010）、宋月輝・恵愛璠・沈璿（2010）、キム・ビョンファンとキム・キョンソク（2012）、徐慧敏（2013）などは主に現代教育に示唆を与える書院の姿に着目し、その意義を導き出しており、1990年代後半から2005年までの研究成果を用いて現代における意義を探っていると言える。

以上をまとめると、2000年以降、書院研究は量的に大幅に増え、多くの研究者が書院研究に参加していると言える。特に教育制度についての関心が高く、その分析や現在の高等教育へ示唆を与える点を論ずるものが多い。しかし、その内容面においては、先行研究の成果から脱却しておらず、踏襲する分析が多く、発展性という点において物足りなさが残る。

3. 観点の多様化

書院研究の量的な増加の背景として、もう一つ述べたいことは文化史・社会史的側面からの研究の隆盛である。文化史・社会史という概念ができたのは、かなり以前のことではあるが、現在もその影響が強い。書院研究においても、既存の官学や科挙を中心とする政治史的な観点から地域社会や書院文化へ関心に移り、より多様な観点から書院を分析する研究が多くなっている。

まず、書院と地域社会の関係を分析した研究についてみる。書院を地域社会と結びつけることは、欧米では既に1980年代から行われていた。しかし、東アジアでは書院の地域性について否定的な観点を堅持してきたため、2000年以降から新たに研究が進んでおり、ここでは例としてパク・ジフン（2004）、李弘祺（2006）、趙曉榮・趙博（2015）を紹介する。

パク氏は、地域社会における書院の立場と書院を中心とする学問ネットワークの形成について考察している。書院は地方官などの関心と支援の下に創建されており、

地域有力者の結集の場であったため、地域と密接な関係を結んでいるという。また、祭礼の中心であり、蔵書機関でもあったため、地域の士人らが集まり、地域懸案に対応する場として作用したともいう。学術の中心地として知識人社会を形成することにも影響を与え、学派間・士大夫間の交流による学問的なネットワークを形成していたという。

李氏は、宋・元代の吉州を対象とし、地域文化と書院の相関性について考察している。特に地域の歴史、文化、民間信仰などは書院の制度や教育内容の形成において影響を与え、地域性を表していたことを強調している。吉州における書院の活動は儀礼・郷約・義荘・祭祀などがあり、その中でも祭祀に注目している。吉州における祭祀活動は宋代以降に発達し、地域の先賢・忠臣を祭る祠堂が広く設けられるようになる。これを儒学伝統と民間宗教が互いに影響を与えた結果であるといい、書院の発展に伴って突然と増加していることを指摘している。また、道学の伝播により発展を成し遂げたといいながら、福建建陽との比較を通じて地域ごとに文化発展の様子が異なることを表し、書院が地域文化の個性と普遍性を同時にもたらしたと述べている。

趙曉榮・趙博両氏は、書院の民間講学について強調し、教育を通じて社会教化について分析している。講学を通じて生徒を教育し、その学術・道徳的な成就によって社会の模範となることから社会教化ができたという。特に口述を根幹とする書院教育の特性によって民衆教化が容易くなり、社会内に儒家的論理と道徳理念が樹立され、社会を安定させるなど国家統治に役割を果たしたと分析している。

これらの研究は、「書院は地域性を持たない」という以前の観念から脱却し、地域社会における書院の姿を表している。特に書院の社会的機能を強調し、その役割に関するより豊富な分析ができています。

次いで書院の祭祀、蔵書機能について分析した研究をみる。書院の主な機能として挙げられるのは、講学・蔵書・祭祀である。その中で講学については既に多くの研究が進んでいるが、祭祀と蔵書に関しては分析が物足りない。

このような状況の中で、朱漢民（2015）は書院の祭祀機能について本格的な分析を行っている点で意義深い。朱氏は士人らの学統観念と学祠を結び付け、書院独特の祭祀の形成について分析している。北宋期からも書院は祭祀機能を持っていたが、それは官学を真似したにすぎず、書院独特の祭祀機能ができたのは南宋期からであるという。理学の発展に伴って先賢・先師に対する祭祀が勃興し、学祠を中心に行われた。このような様子に影響を与えたのが学統観念であり、そこから書院の祭祀制度ができたともみている。

蔵書については、蔵書史の中で書院蔵書について述べているものが多く、最近になり、書院蔵書や書籍刊行を専門的に扱う研究が次々と出てきている。しかし、その内容は大同小異であり、ほとんどが同じ結論に達している。

蔵書史を総合的に整理しているものとしては、傅旋琮・謝灼華（2001）と方建新（2013）³⁾、ソ・ウォンナム（2008）などがある。

その概略をまとめると、宋代書院の蔵書は、北宋期には国家の賜書による蔵書が多く、南宋期に至ってから学術研究への関心が高まったことによって自治的な蔵書が始まったという。特に書院蔵書は、その規模が大きく、印刷本の外に多様な出版物（筆写本、拓本、親筆本など）を所蔵し、学習資料として用い、自治的な管理体系を持っていたことが特徴であるという。また、書院の発展に伴い蔵書事業も拡大したと分析している。ただし、書院蔵書は儒学思想に関わるものが主となっており、国家蔵書や私家蔵書に比べて種類が限定されている点は短所であると述べている。

書院蔵書と書籍刊行については肖永明・于祥成（2011）、李光生（2016）などが挙げられる。まず、肖氏と于氏は、地域文化の発展における書院蔵書・書籍刊行の影響について考察している。書院の蔵書と書籍刊行は、地域文化事業の重要な部分を占めており、官や私家蔵書とは異なる特徴を持っていたという。その特徴とは、書院の構成員のみならず、地域の人々にまで開放していたことや学問に関わらない地域の各種文献を刊行し、地域文化の保存と発展に努めていたことであると述べている。また、李氏は書院蔵書が持続的に発展できたのは、創建者の書籍への関心が高く、書院が学術的な使命を負っていたためであるという。その特徴として、保管するだけでなく教育や研究などのためによく利用されていたこと、広く流通していたこと、書籍の内容が比較的均一であったこと、蔵書楼が設けられていたことを挙げている。また、地域文化の発展や人材養成に大いなる役割を果たし、後代には良質の書院本を残しているなど多くの貢献があると評価している。

これらの研究は、以前には本格的な研究が進まなかった祭祀・蔵書・書籍刊行機能について分析を行っている点で意義がある。ただし、祭祀については今でも教育活動の一環として分析するものが多く、哲学的な意味を探るものになっており、蔵書・書籍刊行においては史料の制限により、ほぼ同様の分析になっていることは物足りなさが残る。

次いで、研究領域を私塾・義塾にまで広めた研究として、顧宏義（2007）をみる。顧氏は義塾を書院と認めており、その根拠として南宋末の文化教育政策を挙げている。そして、その学規である『義塾綱紀』の分析を通じ、

内的には普段の書院教育を含めながらも科挙を重視していたことから特徴づけている。

義塾に関する研究は以前にもあったが、その大多数は宗族との関係の中で義塾を分析しており、近頃は関連研究の数も大幅に減っている。しかし、顧氏のように書院をより広い観点から見直し、義塾などをも含めてみることで研究の裾野が拡張できると考える。

次いで文学面から分析を行っている研究についてみる。以前の書院研究は、あくまでも書院という空間に集中し、思想面や教育面についての分析が多かった。それに対して李光生（2011）や秦璋（2016）などの分析は、書院を文学的な側面から分析しようとしたことで大きな意味を持つ。

まず、李氏は語録体を書院制度の産物と見なし、書院と理学の一体化によって形成したという。教師が生徒を教える際には口述しており、それが記録として残されて形成したのが語録体である。それゆえ語録とは教学活動の記録であり、書院で生徒を教える際に実際に使われた教学案として価値が高いという。また、秦氏は文学作品としての書院賦について分析している。書院賦は書院創建やその盛衰状況、教授内容や社会評論などを主な内容とし、その中でも理学的な内容が特徴的であるという。これは書院と理学の関係が文学に影響を及ぼした結果とみている。

これらの研究は、これまでよく研究に用いられてきた社会学の方法や統計学の方法などから脱却し、新たな方法を用いて書院を分析し、書院研究の視野を広げている。

次いで、仏教との関わりについて分析している研究をみる。仏教との比較は理学研究において早期から進行してきた。宋代新儒学の成立に仏教、特に禅宗の影響があったという観点は、書院研究においても長年通説として認められている。しかし、最近では以前の観点に対する検証的な分析が行われ、仏教の影響よりも先秦儒学からの影響が強力という観点を提示している。黄熙蓉（2013）では、今まで書院の学規が禅宗清規の影響によって成立したという学説を検証し、その程度について考察している。その中で、各内容に関する詳しい分析を行い、学規において禅宗の影響よりも古代儒学からの影響が強いと結論付けている。このような観点の変化は李光生（2011）などからも一部分見られており、これまで続いてきた書院と仏教の関係性において新たに示唆を与えてくれる。

個別書院に関する研究は早くから行われ、白鹿洞書院、嶽麓書院、崇陽書院、応天府書院などのいわゆる四大書院を中心に多くの研究が進んできた。しかし、宋代の書院を個別に分析するには史料が少ないため、ほとんどが明清時代に集中している。ここでは、宋代の個別書院について分析しているものとして、孫海林（2005）とキム・

ジョンソン (2011) を紹介する。

宋代の個別書院研究は、孫氏のように書院の創建者や影響力の強かった人物と書院との関連を分析するものが多い。孫氏は、南宋文人である張栻と、彼が建てた城南書院について考察し、張栻の履歴から城南書院の沿革、両者の関係と教育上の特徴について述べている。特に張栻の思想に基づき、城南書院における教育について推論している。その教育とは、道徳修行を主とし、現実世界について具体的に習う形而下学的な小学から、その筋道を探究する形而上学的な大学の順に進行し、知行合一、討論、省察などを重視していたことを張栻の文集を用いて導き出している。

キム氏は南宋末期の明道書院について書院と官学の関係に注目し、両者共存の状況について考察している。特に、建康府学と共存していた明道書院は独立した機関とはいえ、同様の機能を担っていたというよりも府学を補完する空間であったと述べている。府学の足りない部分である生徒数の制限や科挙登第の重視による思想的な弱点などを、書院との共存によって埋めることができたのである。これを元・明・清につながる官立書院の典型とみなしている。

これらの研究は、以前には注目されていなかった個別書院に関する詳しい分析を行い、より多くの事例を提供している。また、これまでの通史的な分析による表面的な分析から、より深く掘り下げた分析ができていることも重要な意味を持つ。

最後に書院における余暇活動について分析した王福鑫 (2006) を紹介しておきたい。王氏は書院における余暇活動について分析し、その種類や余暇活動の場所としての書院について考察している。書院が旅行や観光の対象になっていた例や友人との交流などにも使われていたことを考察している。これまでの書院研究は教育機関としての書院の姿だけに集中し、他の部分についての関心が薄かった。このような流れにおいて、書院が休養地としての姿を持っているということは示唆する所が多いと言える。

おわりに—今後の書院研究における課題

上述の内容を総合すると、2000年以降の宋代書院研究は量的な発展が著しく、内容面では既存研究と類似しているものが多いが、同時に多様な観点から書院を分析する試みも行われてきたとまとめることができる。最後にこのような動向に加え、これからの書院研究に必要なと考えられる課題について、大きく二つを述べておきたい。その一は、書院に関する定義の再検討であり、その二は史料の問題である。

上述したように現今の書院研究は、教育機関としての書院に集中しているようなイメージが強い。制度、文化、社会的機能など多様な観点から分析が進んでいるが、いずれも書院の教育的な特性に着目し、教育機関・学術拠点としての姿についての考察になっている。それゆえ書院の全体像を探ることはできるが、その類に属さない例については確認しがたい。

これを解決するには、改めて書院という概念について考える必要がある。書院と名付けられた例の中には、教育機関としての様子よりも創建者本人が使用するための個人的な空間として造成されたものが多い。また別途に建物を建てず、家の建物の中で一軒を選び、名を書院とする例も見える。書院を単純に教育機関としてしまうと、これらの例から見える宋代書院の多様な姿を見逃す過ちを犯すことになる。書院を教育機関としてみるだけではなく、その他の姿についても考察すれば、書院研究の底辺を拡張しうると考える。

史料の問題は、既に多くの学者によって指摘されている。これまでの書院研究は、主に書院記を用いて分析を行ってきた。それゆえ、導き出せる結論が制限され、研究が限界に達している。この問題点を解決するためには当然ではあるが、史料の発掘が必要となり、その一環として士人らの文集と石刻史料が新たに注目されている。

宋代の士人らは多くの著作を残しており、彼らの文集から新たな情報を得ることができる。特に、士人同士で行われた手紙のやり取りや彼らの文学作品などが最近注目され、既存の研究では見られなかった書院の姿を解明していることから、その価値を考えることができる。さらに、碑文などの石刻資料に関する検討が同時に進むと、より多様な情報が得られると考える。

それに加えて、吾妻重二 (2008) で主張しているように中国にとどまらず、書院が存在していた国々にまで視野を拡張すれば、書院と呼ばれる空間についてより立体的な分析ができると考える。また、史料の制限により、研究が進んでいない宋代書院建築などの分野についても関心が集まると、新たな研究成果ができると期待される。

注

1. 陳雯怡氏の研究は2004年の出版ではあるが、1996年の学位論文を基にしたものであるため、2000年以前の研究成果としても挙げた。
2. 鄧洪波氏の「中国書院研究綜述 (1923-2007)」(『東アジア文化交渉研究』別冊2, 2008。) p. 22の「1923-2007年書院研究論文分年(代)統計表」と「2008年書院研究綜述」から「2013年書院研究綜述」までを参照。
3. 宋代書院蔵書に関する内容は、傅旋琮・謝灼華 (2001) では上巻、第五編「宋遼夏金元蔵書」の第四章「宋代書院蔵書与寺觀蔵書」で、方建新 (2013) では第六章「南宋書院蔵書」で述べている。

参考文献

1. 単行本

—和文—

市来津由彦,『朱熹門人集団形成の研究』,創文社,2002。

—中文(著者名の五十音順)—

- 季嘯風主編,『中国書院辞典』,浙江教育出版社,1996。
 宮嵩濤編,『嵩陽書院』(中国書院文化叢書),湖南大学出版社,2014。
 湖南大学岳麓書院文化研究所,『中国書院』全8卷,湖南大学出版社,2000~。
 邵群編,『万松書院』(中国書院文化叢書),湖南大学出版社,2014。
 趙所生・薛正興主編,『中国歴代書院志』全16卷,江蘇教育出版社,1995。
 陳谷嘉・鄧洪波主編,『中国書院史資料』上・中・下,浙江教育出版社,1998。
 陳雯怡,『由官学到書院』,聯經出版事業公司,2004。
 鄧洪波編,『中国書院楹聯』(中国書院文化叢書),湖南大学出版社,1999。
 _____,『中国書院章程』(中国書院文化叢書),湖南大學出版社,2000。
 _____,『中国書院攬勝』(中国書院文化叢書),湖南大學出版社,2000。
 _____,『中国書院学規』(中国書院文化叢書),湖南大學出版社,2000。
 _____,『中国書院詩詞』(中国書院文化叢書),湖南大學出版社,2002。
 _____,『中国書院学規集成』,中華書局,2011。
 傅旋琮・謝灼華主編,『中国藏書通史』上・下,寧波出版社,2001。
 方建新,『南宋藏書史』,人民出版社,2013。
 李兵,『書院教育与科学關係研究』,台大出版中心,2005。

—英文—

Walton, Linda, *Academies and Society in Southern Sung China*, University of Hawaii press, 1999.

2. 論文

—和文(著者名の五十音順)—

- 吾妻重二,「東アジアの書院について—研究の視角と展望—」,『東アジア文化交渉研究』別冊2,2008。
 平田茂樹,「南宋士大夫のネットワークとコミュニケーション—魏了翁の「靖州居住」時代を手がかりとして—」,『東北大学東洋史論集』12,2016。
 李弘祺,秦玲子訳,「中国書院史研究—研究成果・現状と展望」,『中国—社会と文化』5,1990。

—中文(著者名の五十音順)—

- 閻利雅,「宋代私学的特性及其社会教化功能」,『文教資料』2009年35期,2009。
 王福鑫,「宋代書院与休閑」,『貴州社会科学』2006年4期,2006。
 顧宏義,「南宋横城義塾及其「義塾綱紀」考論」,『南京曉莊学院学报』23卷5期,2007。
 黃熙蓉,「禪門清規对『白鹿洞書院揭示』的影響」,『江西教育学院学报』2013年2期,2013。
 蔡慧琴,「江西書院学規補遺」三,『南昌師範学院学报』2015年4期,2015。
 朱漢民,「南宋書院的学祠与学統」,『湖南大学学报(社会科学版)』29-2,2015。
 鐘景迅,「宋代書院的學術自由特色及其啓示」,『現代教育科学』2006

年3期,2006。

- 肖永明・于祥成,「書院的藏書,刻書活動与地方文化事業的發展」,『厦門大学学报(哲学社会科学版)』2011年6期,2011。
 蔣紫云・鄧洪波,「2009年書院研究綜述」,『江西教育学院学报(社会科学)』2010年5期,2010。
 秦璋,「論宋代的書院和書院賦」,『遼東学院学报(社会科学版)』2016年1期,2016。
 徐慧敏,「宋代書院經費来源及其对高校發展的啓示」,『揚州教育学院学报』2013年3期,2013。
 宋月輝・惠愛瑤・沈璋,「宋代書院師生管理,師生關係的特点及現代意義」,『揚州大学学报(高教研究版)』2010年5期,2010。
 孫海林,「張栻与城南書院研究」,『湖南第一師範学报』2005年1期,2005。
 孫文明,「宋代書院刻書文化」,『鷄西大学学报』2013年1期,2013。
 陳潘,「近三十年来中国書院研究綜述」,『皖西学院学报』2011年4期,2011。
 張曉榮・葉美蘭,「宋代書院發展的背景及其特性」,『南京郵電大学学报(社会科学版)』2014年3期,2014。
 趙曉榮・趙博,「論宋代書院对社会教化的作用及其影響」,『蘭台世界』2015年36期,2015。
 張勁松,「江西書院学規補遺」一・二,『南昌師範学院学报』2015年1,2期,2015。
 張世敏,「從古代書院看当代中国社会」,『東洋礼学』23,2010。(韓国発表)
 鄧洪波・周月娥,「八十三年来的中国書院研究」,『湖南大学学报(社会科学版)』2007年3期,2007。
 鄧洪波,「中国書院研究綜述(1923-2007)」,『東アジア文化交渉研究』別冊2,2008。(日本発表)
 鄧洪波・陳仙,「2010年書院研究綜述」,『中国史研究動態』2012年4期,2012。
 鄧洪波・趙路衛,「2011年書院研究綜述」,『北京聯合大学学报(人文社会科学版)』2012年4期,2012。
 鄧洪波・趙瑤傑・姚岳,「2012年書院研究綜述」,『北京聯合大学学报(人文社会科学版)』2013年4期,2013。
 馬友斌・鄧洪波,「2008年書院研究綜述」,『江西教育学院学报(社会科学)』2010年1期,2010。
 蘭軍・何君揚・鄧洪波,「2013年書院研究綜述」,『南昌師範学院学报』2014年5期,2014。
 李弘祺,「伝統中国的書院教育:有“自由教育”效果的“前自由教育”」,『通識教育季刊』2-1,1995。
 _____,「宋元書院与地方文化—吉州地区書院,學術与民間宗教」,『湖南大学学报(社会科学版)』2006年6期,2006。
 李光生,「宋代書院与語録体」,『蘭州学刊』2011年2期,2011。
 _____,「宋代書院藏書論略」,『河南科技学院学报』2016年3期,2016。
 李艷婷,「宋代書院研究」,『安徽文学』2014年3期,2014。

—韓国語文(著者名のハングル表記順)—

- 김병진(キム・ビョンジン),「南宋時期 建康府 明道書院의 연구」(日本語訳:南宋時期建康府の明道書院研究),『東洋史学研究』116,2011。
 김병환(キム・ビョンファン)・김경석(キム・キョンソク),「남송 시대부들의 서원교육과 도덕교육적 의미연구」(日本語訳:南宋士大夫の書院教育と道德教育的意味の研究),『社会科学教育』15,2012。
 박지훈(パク・ジフン),「12세기 南中國 地域社会의 書院 네트워크」(日本語訳:12世紀南中国地域社会の書院ネットワーク),『中国学报』49,2004。
 서원남(ソ・ウォンナム),「宋대의 문헌정리와 藏書에 대한 고찰」

(日本語訳：宋代文献整理と蔵書に関する考察), 『中国語文学論集』50, 2008。

—英文(著者名のアルファベット順)—

Chaffee, John W., “Chu Hsi and the Revival of the White Deer Grotto Academy, 1179-1181 A.D.”, *T'oung Pao, Second Series*71, 1985。

Hymes, Robert P., “Lu Chiu-yuan, Academies, and the problem of the Local Community”, *Neo-Confucian Education (q.v.)*, 1989。